

ご注文はうさぎですか？～私はあなたあなたは私～

れんにゅう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故死した主人公が何故かココアに生まれ変わり生きていき、本当にこのまま生きていていいのかと悩む主人公が友達と日々過ごす話

憑依系が苦手の方は読まないほうがよいかもしれません。

こんなのココアちゃんじゃない！と思うかもしれませんが暖かい目で見守ってください

少しシリアスが入ると思います

目次

6羽 2 part	6羽 1 part	5羽	4羽	3羽	2羽	1羽	プロ ロー グ
60	52	42	35	27	14	4	1

プロローグ

まず一言、私は死んでしまった。死因はたぶん車に跳ねられての即死だと思う。女の子が車に轢かれそうなのを私は何も考えず体が勝手に動いて轢かれた…。あの子は大丈夫なのだろうか…。

痛みはあんまり感じなかった…。感じる前に死んだのかもしれない。こう思うと人はあっけなく死ぬんだね…。

一瞬の出来事、何の前触れも無い。ああ…。こんなもんなのかと思っただけ…。

だからこそ疑問に思う…。

”なぜ私はこんな風に考えることができるのか”

死者は天国や地獄に行くとか昔から聞くけど実際に死んだ人に聞いたことではないから確証ではない事はわかってる。

では、今自分に起こっている現象はなんなのだろうか…。死んでこれまでのことを反省する時間なのか、はたはずっとこのまま何もなく体もないまま意識だけの状態なのか…。死んだ人たちはこの体験をしているのか…。疑問は考えるとキリがなくなってくる。

さて、どうしよう…。さすがにこのままはすることがなくて逆に死んでしまう…。もう死んでいるけど…。

生きていたことに未練が無いとは言いが切れないが…。いや、まだ大學生真っ最中だった私に未練がない方がおかしいのか…。したいことは山ほどあった…。彼氏などももちろんほしいとは思った…。他にもまだしたいことはあったが今ではすべて無意味になっている。

ああ…。神様…。もしいるのでしたらお願いします…。この私の意識だけでも消してください。このままでは未練ばかりでおかしくなってしまう。それならいっそこんなことも考えられないように本当の意味で死にたい…。

お願いです神様……どうか……” 私を死なせてください”

その瞬間……何の前触れも無く唐突に私は違和感を感じた。立ち眩みのようなくらくらする感じが起こり吐き気のようなものも少なからず感じた。

唐突なことに私は何が起こったかわからなかったがすぐ理解したのは……この何も無い状態が終わるということだった。

ああ…… やつと楽になれる……でもやっぱり少し怖いな……

今の私に体があれば間違いなく震えているだろう……終わってほしいと思っているがやはり消えるのは怖い。

せめて、もう少しいろいろなことがしたかったな……

だんだんと意識が薄れていくのを感じ、そろそろタイムリミットが近づいてきた。薄れていく意識の中これからどうなるんだろうという疑問は強くなっていくばかりだった。

死者が行く……死者だけが知るところに行くのだろうか……そこにはどんな人がいるのだろうか……

私のような経験をした人はいるのだろうか……もし行けたら聞いてみよう。うん、そうしよう……

薄れ行く意識の中私はそんなことを思いながら意識を閉ざした……

「ココアー！本当に行っちゃうの…？」

「もう決めたことで手続きもしちゃったし今更変えられないからね」

「うう… お姉ちゃん寂しいよ〜ココア〜…」

「姉さんは妹離れして… それにちゃんと定期的に手紙は書くし帰ってくるから…」

「本当!?!絶対だよ!?!私からも会いに行くからね!!」

「わ、わかったから… もう… それじゃあ行ってきます」

あれから15年… 私はなぜだかわからないけど保登 心愛という名前をもらって生まれ変わった。

1羽

あれは意識が途切れた後、目の前が明るくなったのを感じた私はふと気づいたら、心愛という女の子になっていた。

意識がはつきりしたのに違和感が無いこの感じは、そう・・・幼い頃に自分という意識がはつきりと覚醒したときと同じだった。その時はとても驚いた・・・神様のイタズラかと思っただけで考えても仕方がないとそのまま私は保登心愛として生きることにした。

私は生前、姉という立場だったから妹という立場には妙に違和感を感じた。そして、姉が私にべったりしてきた時には、生前の私の妹もこんな気持ちだったのかと感じたけど、妹は笑顔で喜んでいた気がする・・・時々鼻血を流していたけど・・・

15年が経ち、私は幼い時に行ったことのある町の高校に下宿という形で入学することにした。お母さんは賛成してくれたけど姉さんは寂しいなどと言い反対だったけどなんとか説得ができた。

なぜ、親元から離れてまで遠い高校に通うのかというと・・・自立したいのも一つの理由なんだけど、もう一つが私の中では1番の理由だった。それは生まれ変わって15年・・・私が感じていたのは罪悪感だ。家族に生前の記憶のことを黙り続けていると”私はこの家族なの?”と自分に問いかけてしまう・・・ちゃんと血の繋がった家族だが自分は本当にここの家族としての資格があるのかと考えてしまう。

そして私が1番考えてしまうのは、私が死ななければ本当の保登心愛がここにいたかもしれない・・・私と違って元気で場を盛り上げている子かもしれない・・・

1人の子の人生を奪ってしまった・・・その言葉が私の奥深くまで刻まれ続けている。

「……ん……んう……あ……れ……」

気づくと懐かしい町並が見え、そこで目的の場所に着いたとわかった。

「ふわあ……気づいたら寝てたんだ……んう〜！」

背中を伸ばし眠気を飛ばし、電車が止まるのを待つ。

「ふう……町並みが変わってなければいいんだけど……」

電車が止まり、電車を降りて駅の外に出るとやっぱり懐かしい町並みだけど少し変わっていた。

「ん〜……私方向音痴だから迷わなければいいんだけど……あ、これフラグかも……」

心配しながら地図を見ながら目的地に向かって歩き出した。

はい、迷いました。ここはどこだろう……さすがに無理だった。

「さて、どうしよう……人に聞きたいけど……もうお昼なのに人がいない……」

さてさて……これはまずい……周りを見ると目に留まったのが【RABBIT―HOUSE】と書かれた喫茶店だった。

「とりあえず休憩も兼ねて入ってみよう。それでお店の人に聞こうかな」

私は地図をポケットに入れて【RABBIT―HOUSE】に入っ

「いらっしやいませ…」

そこには薄い水色の髪をした背の低い女の子がいた。

「あのお客様…？」

「… あ、ごめんなさい…！少し歩き疲れてて…」

「そうですか？席はこちらです」

(ここのアルバイトかな？それにしても小さい… 中学生くらい？)

席に案内され、メニューを渡されて気づいた。女の子の頭の上うさぎらしき動物が乗っかっていた。

「… もじやもじや？」

「… ?これですか？これはティツピーです。一応うさぎです」

「うさぎ… ?触っても大丈夫かな？」

「その前にご注文を…」

そうだった。注文しないと話が進まないね。

「じゃあ、そのうさぎさんをお願いできるかな」

「ティツピーは非売品です」

まあそうだよね。こんなこと言うお客さんなんて普通いないもんね。

「冗談はここまでにして… えくと… とりあえずコーヒーを1杯お願いできるかな」

「わかりました。少々お待ちください」

そう言い奥のカウンターに行き、コーヒーを粉末状にする物を取り出して作り始めた。

「ほ、本格的… ってあの子が淹れるんだね」

まだ小さいのにすごい。私も家がパン屋だからお店の手伝いをす

るけど1人は大変そう。

そう考えながら私は窓の景色を見る。

ああ… 落ち着く… やっぱりここはいいところだね。

それから数分後して女の子がコーヒータを持ってきた。

「どうぞ、コーヒータになります」

「ありがとう、それにしてもお店には君しかいないのかな？」

「もう1人アルバイトの方がいます」

「2人でもお店はキツイと思うような…」

「ここはそんなに混まないの？2人でもお店は回れますので…」

「ふん… あつ美味しいね」

うん、これは美味しい味に味に深みがあつて苦味もまた美味しさを引き立てている。

やっぱり落ち着きたい時にはコーヒータに限るね、種類などはわからないけど。

「あの…」

「ん？どうしたの？」

コーヒータを飲みながら休んでいると女の子が話しかけてきた。その手にはさつきのおさぎがいる。

「もしよかったらティツピーに触りますか？」

「え？いいの？さつきのは冗談で言ったんだけど… いや、触りたいといえれば触りたいけど…」

「コーヒータを頼んでくださったサービスと思つてください。その… お客様さんは優しそうなので安心できます」

「そこまで言われると断れないよ… それじゃあお願いしようかな」

「はい、どうぞ」

女の子からティツピーというおさぎを渡してもらつて膝の上に置いた。

触つてみるとわかるね… ああ… 気持ちいい毛がモフモフして

て歩いてきた疲れが消えていく…

「この娘中々のテクニシャンじゃ…」

「ん？何か今ダンディな声が聞こえたんだけど…」

「き、気のせいです」

…？気のせいかく… それにしても気持ちよすぎだね。この感
触癖になる…！

「気持ちええ〜♪」

「いいな…」

私がおさぎを撫でてしていると女の子が羨ましいという目でうさぎを
見ていた。

ああ、この子も触りたいんだ。それもそうだこの感触なら毎日触つ
ていても飽きることは無いよ。

「君も触る？私ばかりじゃあずるいからね」

「い、いえ大丈夫です！… そっちじゃないので…」

ん？最後のほうが聞き取れなかったけど仕事だからだろうか…
今、お客さんは私しかいないから気にしなくていいのに。

って… そろそろ、地図のことを聞かないと…

私はコーヒーを飲むと女の子に話かけた。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど大丈夫かな？」

「…？はい、大丈夫ですよ」

「私、春からこの町の学校に通うことになったんだけどね…」

「あ、そうだったんですか」

「でも、下宿先探してたら迷子になっちゃって… 私昔から方向音
痴って言われてね。道を聞くついでに休憩しようと思っただけ。香
風さん家ってこの近くのはずなんだけど知ってる？香る風って書く
んだけど」

「… 香風はうちです」

「あ、そうだったんだ… これってすごい？こういう場合ってこれ
は偶然を通り越して運命だよ！って言ったほうがいいかな？」

まさか聞きに入ったお店が下宿先だなんて、確率的に結構すごいほ

うだよね？

「どうなのでしょう…。あ、私はチノです。ここのマスターの孫です」

「あ、お孫さんだったんだ。もしかして中学生？」

「はい、中学2年生です」

「まだ中学生なのにコーヒーを淹れることができるなんてすごいいね。あつ私は保登心愛。気軽にココアと呼んでね」

「わかりました。こ、ココアさん…」

「ゆつくりでいいから慣れていこうね。それで、学校の方針でね下宿させて頂く代わりに、その家でご奉仕しろって言われてね。でも見た感じお店の方は私は必要ない感じかな？」

「そうですね…。といっても家事は私一人で何とかなってますし…」

わお… 私することがないじゃん…。要らない子かな？

「ですが、一応お店のほうを手伝っていただけると嬉しいですよ」

「任せて。まだ、全然わからないけど足手まといにはならないくらいには頑張るよ。それとマスターさんは留守かな？あいさつしたかったんだけど…」

「祖父は去年…」

チノちゃんが少し悲しい顔をした。その顔で察した私は何故かチノちゃんを抱きしめていた。

「…ッ!？」

あ、これあとで気まづくくなるやつだね…

でも、それ以上に私にはチノちゃんが生前の妹に見えたのだ。あの子もこんな風に悲しんでいるのかなと思うと本当に申し訳ない…

「ごめんね…。嫌なこと聞いちゃって…」

「い、いえ…。もう平気なので…。父もいますしバイトの子がもう一人…」

「ならよかったよ…。チノちゃんは笑っていたほうが私は好きだし」

「す、好きって…。私はあまり笑いません…。！」

「そうかな？そんなこと無いと思うけど」

私にとつてチノちゃんの表情はなんとなく読み取れる。今は照れてるのかな？まあ、こういうところが可愛いんだよね。

「それに……祖父の話のときのココアさんは……何か思いつめていたような顔をしていました……」

「……！それは私が聞きにくいことを聞いちゃったから……」

「本当にですか？それでもあまり気にし過ぎてはだめですよ……」

「う、うんわかったよチノちゃん。あ、そうだチノちゃん私のことは家族と思ってくれないかな？」

「家族ですか？」

「うん、まだ難しいけど……徐々にでいいからね。私がチノちゃんの寂しい思いを消してあげたいし」

もう、チノちゃんのある顔見たくはない。チノちゃんには笑っていてもraitたいしね。

「わかりました……それではココアさん早速お店の手伝いをよろしくお願いします」

「うん、任せて」

さて、新しい生活の始まりだね。

「お姉ちゃんって呼んで♪」

「ココアさん……」

「それではココアさん、早速働いてください」
「任せて♪」

「…ッ!？」

歩き出そうとした時、脳裏に何かが流れ込んできた。思わず足が止まり、頭に手を置く。

何今の…何だったの…さっきの私とチノちゃんの会話だったけど…でもあんな会話していない…

なら何だ？してもいない会話…そうかあの会話は…

「ココアさん？大丈夫ですか…！」

チノちゃんが心配してくれた。こんな子に心配させちゃうなんて私はだめだなあ…

「大丈夫だよチノちゃん。少し長旅で疲れちゃったのかもね」

「そ、それならお店の手伝いしてもらおうわけには…」

「ふふ、心配してくれてありがとう。でもこれくらいへっちゃら、それにお店もあと少しだしね」

「無理しないでくださいよ…？」

「あはは…わかったよ…」

私はにつこりと笑い、チノちゃんの頭を撫でた。

「ふわあ…んう…！」

「さて、更衣室はどこかな？」

「あっ…」

撫でるのを止めてチノちゃんに更衣室の場所を聞く。

「…更衣室はそこです…私は制服をもつてくるので先に
行っていてください」

「う、うん…」

あれ何か不機嫌？気のせいかな？とにかくまずは更衣室に行かないと。

更衣室に入り去り際にチノちゃんから聞いた私のロッカーの場所に行く。

チノちゃんが来るまですることがないけど…どうしたもんかな…

適当に部屋の中を見渡しているとどこからか視線のようなものを感じた。

覗き見？でも窓はちゃんと閉まってる…それにこの視線…

「これはもしかして…ワイルドで男勝りな性格な女の子だけど実は普通の女の子っぽさに憧れている一面があつてそして可愛いものが好きだけど自分のキャラと合っていないと考えていて、隠したり諦めたりしているあと…」

「うわあああああああ!!!」

私が語っているとロッカーの中か下着姿の女の子が出てきてその手にはモデルガンらしき銃が握られていた。

え？そんなところで何しているの？新手的覗き魔？それとも泥棒？まあ、冗談はここまでにしてこの子がもう一人のアルバイトの子かな。

「だ、誰だお前は!! って隠れて聞いていたらいきなり人の気になっていることを…!!」

「あつ、もしかして当たってた？君意外と可愛い一面あるね」

「か、かわ…!?!」

「あ、私は保登 心愛。今日からここで下宿することになったのでよろしくお願いします」

「ま、待て！話の展開が速くて追いつかない!!それに下宿とかそんな話し聞いてないぞ!!それにこれを見てよく平気でいられるな…!」

「そこは…なんでだろう？下宿の件はチノちゃんの反応から見てもそんな気がしてたけど…チノちゃんのお父さんに聞けばわかる

と思うよ?」

このアルバイトさんはおもしろいね。見た目からして高校生かな?

「ココアさん制服もって... 何しているんですかりげさん...」

「チノ!! 下宿とか聞いてないぞ!!」

「私も知りませんでした。ですが紙に書かれていたことは本当ですし... そこはお父さんに聞いてみないことには...」

「ということだよりげさん。よろしくね」

「なんなんだー!」

姉さん... こっちは楽しくしています。どうか心配しないでください。

こうして、私とチノちゃんとりげさんは出会った。

2羽

更衣室での件が収まり、私たちは今お店のホールで自己紹介をして
いた。

「では、もう一度… 香風 智乃です。春から中学2年生でこの
今のマスターの娘です」

うん、落ち着いて良い子そうだね。この子が妹になってくれたらど
れだけ私は喜んでしまうのだろう。ああ、可愛いなく。

「コホンツ… 次は私だな… 天々座 理世だ。春から高校2年生
でここでアルバイトをしている」

この人は… うんやっぱりワイルドだね。でもなんというか…
お嬢様っぽい雰囲気もするけど… 歳もやっぱり私より1つ上だ。
まあ精神は私のほうが上だけど… あれ… 歳を足したらもうそろ
そろ三十路… ううん考えないようにしよう。

「最後に私だね。保登 心愛です。春から高校1年生でここで下宿
させてもらうことになっています」

うん。完璧これが普通の自己紹介だよね。そう、普通が一番。

「そういえば、お仕事の手伝って何すればいいかな？」

「そうですね… リゼさんと一緒にコーヒー豆の袋をキッチンまで
運んできてもらえますか？」

「わかったよチノちゃん。リゼさん行きましょう」

「あ、ああ… わかった」

私とリゼさんは倉庫にあるコーヒー豆の袋を運びに行った。

「ここだ、この袋をキッチンに運んでいくぞ」

「大きい袋だと思っけど… 重そう… でもやるしかない…」

私は袋に手を掛け持ち上げ… されたけど、これは普通の女の
子には難しいくらいの重量だった。

いや、重すぎだ… え？コーヒー豆ってこんなに重いんだ… 私み

たいな普通の女の子にはこれはキツイだろう…。そう普通の女の子だ。

「リゼさん。これは普通の女の子にはキツイですよ」

私は袋を降ろし後ろをちらりと見ると、慌てて肩に担いでいた袋を降ろすリゼさんの姿が見えた。

いや、これは本当にすごい…。もう片方の肩でもう1個持てそうだったよね？すごい力持ちだ…

「え!?あ、ああ！確かにキツイな！無理だ…。普通の女の子には無理だ…！」

「ソ、ソウデスネヨネ…」

さすがリゼさん…。あなたはすごい女の子だね…。うん…

「ふう…。仕方ないです。小さい袋を運びましょうか」

大きい袋の近くに一回り小さい袋があった。これならなんとか持つて行けそうかな。

「よっ…。ん…。！」

小さくても重い…。持つていけそうだけど、これは中々キツイ…。一回袋を降ろし、後ろを見ると…。驚くことに小さい袋を両肩に2

個ずつ計4個持つているリゼさんがいた。

…。あなたはいったい何者？その服の内側にはすごい筋肉が隠れているの？

「小さい袋でも1つ持つのがやっつとですね…。うう重い…。」

「え!?た、確かに1つ持つのがやっつとだ…。1つ…。」

リゼさん…。近々あなたに筋トレでも教わりたいと思います。

そう心に決め、必死にキッチンまで袋を運んだ。

袋をキッチンまで運ぶ作業から少し時間が経ち、今はお皿を拭いている。

お客さんは、今はいない。少しきが楽になっている。

お皿を拭いているとリゼさんが歩いてきた。

「そうだココア、今お客さんがいないから丁度いい、メニュー覚えて

おけよ」

「あ、そうですね。ありがとうございます」

メニューを受け取り、開いてみると…そこにはたくさん種類のコーヒーが書いてあった。

「けっこう多い…覚えるのも一苦労かも…」

よく聞くカフェ・オ・レやカプチーノならわかるけど…グアテマラ・アンティグアやマンデリン・カロシとはなに？そんなの聞いたこともないけど…

「そうか？私は一目で暗記したぞ」

「…さすがです。すごいですね」

何この人…万能過ぎる…!?どこまですごいの…

「ふふ、訓練してるからな。チノなんて匂いだけでコーヒーの銘柄当てられるし」

チノちゃん…あなたもか…このお店にはこんなすごい人ばかりなのか…

「チノちゃんさすがだね。私より大人っぽいね」

「ただし、砂糖とミルクは必須だ」

ああ…今日一番安心した…気がする。やっぱりまだ中学生だもんね。

でも特技があるっていいな…

「はあ…2人共いいな…私にはこれといって特技がないし…何かあったらな…」

はあ…これが才人と凡人の差か…

つとそういえばチノちゃんはさつきから何をしているんだろう。

「チノちゃん何持ってるの？」

「学校の春休みの宿題です。空いた時間に使っています」

えらい…宿題をこんなに真面目にしているなんて…！

せっかくだから見てあげようかな。どれどれ…数学か…

「あ、その答えは128でその隣は367だとチノちゃん」

「……」

ん？リゼさんがこつちを見てなにか考えてる…何をしてくるの

かな…

「ココア、430円のブレンドコーヒーを29杯頼んだらいくらになる?」

ふっ… そんな問題… さっきのメニューを覚えることより簡単だよ。

「12, 470円ですよね」

「…!?!」

これくらい暗算でできないと、大学生だったんだし… 私の特技… 見つからない…

「うん… 私にも特技あったらな…」

「(こいつ意外な特技を…)」

特技はないかと探していると、お店のドアが開いた。

「いらっしやいませ♪」

にこっと笑みを出しお客さんの所に歩いていく。

これでもレストランでバイトをしていた経験があるから慣れてい

る。

「(あの笑顔は今日一番…)」

「あら新人さん?」

「はい♪今日から働かせていただくココアといます♪」

自己紹介をしてお辞儀をする。この人はここの常連さんみたいだね。

「よろしくね♪キリマンジャロお願い」

「はい♪」

キリマンジャロー1つと… ああ… この感じ久しぶりだな…

「…」

「チノ… あれは誰だ?」

「ココアさんです… たぶん」

「人ってああも変わるんだな…」

「あれがココアさんの特技でしょうか…」

「でも何だかんだ言って…」

「ココアさんが一番大人っぽいです」

ん？2人が何かを話している。気になるけどまずは注文を伝えないと。

「二応、接客は大丈夫かも。キリマンジャローっお願いします」

「この変わりよう…。」

「これはえらいのでしょうか…？」

「…??」

何の話だろう？まあ、たぶん大丈夫ってことかな。

「ありがとうございます♪」

お店にいた最後のお客さんがいなくなった。そういえば、ここのお店って名前にうさぎが書いてあるけど、これといってうだぎがないよ
うな…

「ねえねえチノちゃん」

「はい？」

「このお店の名前ってラビット・ハウスだよね？うさぎってものがあんまりないようだけど…うさ耳とか着けたりしないの？」

「うさ耳なんて着けたら違うお店になってしまいます。それにこの落ち着いた感じが良いんです」

「ふーん…リゼさんとかうさ耳つけたらけっこう可愛いと思うけど…。」

リゼさんはスタイルも顔立ちも良い。町に出ればモテまくるのは必然…そのリゼさんがうさ耳なんて着けたらどうなると思う…

全国の男の子は可愛すぎて悶え苦しむだろう…

「そんなもん着けるか…。」
なにやら考えている様子…たぶんバニー姿の自分だと思っ
ど…

そう思っていると…リゼさんの顔はみるみる赤くなっていく。

「露出度高すぎだろ!!」

「うさ耳の話ですよね？」

予想通りの反応だった。この子は意外と恋愛ものでキスシーンとかで赤くなるタイプかな？

「……」

チノちゃん…君も何を想像しているのかな。お姉さんに話してごらん？話してごらん？でもその赤くなっている様子も可愛いからあえて言わないけど。

「じゃあ、リゼさんなんでラビット・ハウスなんですか？」

「そりゃあ、ティツピーがこの店のマスコットだからだろ？」

ティツピー…確かにうさぎだけど…うさぎに見えない…

「ティツピーはこう…うさぎらしくないというか…なんというか…」

「じゃあ、どんな店名がいいんだ？」

来たねこの質問。私が何を言っても店名が変わることなんてないからこの話題は本当はしなくてもいいんだけど…

暇だからもう少ししてよう。ここはチノちゃんが喜びそうな…

「そうですね、ずばりモフモフ喫茶ですね」

「それはまますぎるだろ…」

そう思ってしまうますよね？ですが見てチノちゃんを…！

リゼさんがチノちゃんに目を向けると…

「モフモフ喫茶…!!」

「気に入った!？」

チノちゃんも女の子…そうゆうのに興味があるんだよね。中学生らしくて可愛いよ。

「ん？リゼさん何しているんですか？」

リゼさんがコーヒーの入ったコップに何かを入れていた。

「これか？これはラテアートだよ。カフェラテにミルクの泡で絵を描くんだよ。こんな風に…」

カフエラテの表面には綺麗な模様が描いてあった。

「これがラテアート… テレビで見たことありますけど、実際、間近で見たのは初めてですね」

「この店ではサービスでやってるんだ、描いてみるか？」

「絵なら任せてください。町内会の小学生低学年の部で金賞とったことがあるので」

「それはすごいのか…？」

たぶんつつこまれるだろうと思って先に言った。でも絵なら少しは得意かもしれない。

「まあ、手本としてはこんか感じに…」

そう言い新たにコップが3個出てきた。そこにはハート、猫の顔、四葉のクローバーが描いてあった。

ん？手本ってこれけっこう難しいと思うんだけど…

「上手ですね。すごいです」

「そ、そんなに上手いか…？」

「はい、すごいですよ。リゼさんって絵上手いんですね」

「い、いや… それほどでもないよ…」

あ、これは… そうだせつかくだから…

「よかったらもう1つ作ってもらえませんか？」

「しよ、しようがないな… 特別だぞ…！」

ふふ、思ったとおり。それにしても本当に上手い… やっていると
ころを見て勉強しよう。

「本当ですか？ありがとうございます」

「やり方もちゃんと覚えろよ？」

「わかってますよりゼさん」

さて、どんなものなのかな。この目でじっく… り…

「ふっ！うおおおおおおー！」

そこには、すごい入れ方でミルクをコップに入れ、高速で絵を描いていくリゼさんがいた。

「できたっ!!」

そこには戦車が描いてあった。え、戦車？

「やっぱり上手ですね…。」
うん、確かに上手… 上手なんだけど… 真似できない。
「全くそんなに上手くないって!」
「いえ… 上手を通り越して人間業かどうか悩むところですね。さて、私もやってみましょう…」
「できるきがしないけど… あんがい何とかなるかもしれない…」
「頑張れ」
さて、頑張ろうかな。

「… はあ… 中々難しい… イメージ通りと違う…」
「どれどれ…!?!」
ラビットハウスだからうさぎを描こうとしたけど、曲がっちゃったりして上手に描けなかった。

「(か、かわいい!!)」
「リゼさん… 笑わなくても… あ、チノちゃんも描いてみる?」
「私ですか?」
チノちゃんってどんな絵を描くんだろう… 匂いでコーヒーの銘柄を当てるんだからきつとすごいのができるはず。
そしてチノちゃんがラテアートを始めた。

「確か、チノの描くラテアートって…」
「できました」
「…」
「…」
「どうしました?」
「な、なんだろう… この敗北感… 可愛さでは負けてないと思うんだけど… 何かで負けている気がする…」
うん… チノちゃんの絵の能力が大体わかった気だするよ。
「ココア… チノの絵は… 私たちの絵と一緒にしちやあ…」
「はい… わかっています…」

「どうしたんですか…?」
こうして私の初日のお手伝いは終わった。大変だったけどその分楽しいことなどがあつて良い1日だった。

「お疲れ様チノちゃん、リゼさん」

「お疲れ様です」

「お疲れ様」

お仕事が終わわり、私たちは更衣室で着替えをしている。やっぱり初日は疲れるね…

「ココアは今日からこの家出寝泊りするんだよな?」

「はい、そうですよ。チノちゃん今日の夕食よかったら手伝うよ?」

「いえ、1人でできますから大丈夫ですよ」

「さすがに年下の子1人で作らせるのは…私の心が…」
野菜を切ったりするくらい手伝いたいけど…だめかな?

「2人でやればはやく夕食ができると思うけど」

「大丈夫です。今日来たばかりで疲れているココアさんに手伝わせるわけには…」

「これくらい大丈夫だよ?」

「ですが…」

「(楽しそう…)」

ん?どこからか視線が…気のせいかな?
とにかくなんとしても夕食の手伝いをしないとね。

「じゃあな」

「お疲れ様でした」

「リゼさん気をつけて帰ってくださいね」

リゼさんが帰り、私たちは夕飯作りを始める。けどまだ手伝う許可をもらえていないんだよね…

チノちゃんがエプロンを着始めた。

「夕飯はシチューでいいですか？」

「あ、なら野菜を切るの任せてよ」

「いえ、大丈夫です」

「そ、そう？」

うくん…ここまで断られるとは…仕方ない今日は引いておくかな。でもすることがなくなった…

何かないかと考える昼の時にせっかくだからと私、チノちゃん、リゼさんをラテアートで描いたのを写真でとっていたのを思い出した。せっかくだから待ち受けにしようかな。あ、けっこう似合う…チノちゃんに見せてみよう。

「チノちゃんちよつといいかな」

「はい、なんでしようか」

「これどうかな」

野菜を切るのを止め、私のほうを向くチノちゃん。目の前に携帯を出して待ち受けを見せた。

「これ…」

「さっきね密かに作ってたんだ」

「私たち…」

「そうだよ、可愛くできたと思うんだ」

「……」

喜んでくれたかな、作った甲斐があったみたいだね。

待ち受けを見せていると、廊下の方から音がした。気になりそっちの方を向くとドアが開き男の人が入ってきた。

顔立ちや年齢から見て…チノちゃんのお父さんかな？

「こちら父です」

「君がココアくんだね。」

…けっこうイケメンな声をお持ちで…さすがチノちゃんのお

父さん。

「この家も賑やかになるね。今日からよろしく」

「は、はい。お世話になります」

「こちらこそ、チノをよろしく」

「はい、任せてください」

うん、良い父親だ。イケメンでこんなに優しいなんて…羨ましい。
い。

「それじゃ」

「は、はい」

チノのお父さんがそのままお店のほうに行ってしまった。

「あれ？お父さんも一緒に食べないの？」

「ラビットハウスは夜になるとバーになるんです。父はそのマスタ―です」

「バーか…なんかかっこいいね」

バー…私も一度行ってみたいと思ったな…あの大人の雰囲気
がちよつと好き。

え？なんか裏世界の情報を提供してそうでかっこいいとかは…
思ってないよ？

「そろそろかな？」

「もうすぐです」

シチューがぐつぐつといいい匂いを出している。ああ…お腹が
もつと減っちゃうよ。

「なんかこうしていると家族って感じだね」

「家族ですか？それを言うなら姉妹の方が近いですよ」

「え？でもチノちゃん見たいな可愛い子が妹なんて私には勿体無い
よ」

確かに、チノちゃんが妹だったらどれだけ嬉しいことか…こんな
に可愛い子が妹なんて…幸せすぎて死んでしまう。

「そんなことないですよ…ここ、ココア…お姉ちゃん…」

少し照れながらそう言ってくるチノちゃん。うん…可愛い。も
う一度…可愛い。

「ふふ、ありがとチノちゃん。そろそろ出来上がるねお皿に入れようか」

「・・・はい」

ん？何かチノちゃんが膨れてるような・・・ はやくシチュー食べたいのかな？

「チノちゃん？」

「なんでもありません・・・」

「・・・??」

こうして夕食が出来上がり、その後は食べ終わって一緒に食器を洗ったりした。

「ふう・・・ あとはお風呂か。先に入っていいよチノちゃん」

「いえ、ココアさんは疲れていますからココアさんから・・・」

「私は・・・ まだ慣れてないから時間かかると思うし・・・ それだとチノちゃんが可哀想だから」

「「・・・」」

チノちゃんも私も一步も譲らない・・・ なんだろうね。さて、どうしようかな。

「な、なら・・・ その・・・ 一緒に入りませんか・・・？」

「一緒に？いいの？今日あったばかりの私と入るのはさすがに・・・」
私も初めて会った子と初日から一緒のお風呂は・・・ いろいろと緊張する。ましてやチノちゃんは中学生さうゆうのに抵抗を感じ始めるお年頃だ。

「だ、大丈夫です・・・ たぶん」

「んー・・・ それじゃあせつかくのお誘いだし入ろっか一緒に」

「はい・・・！」

こうして初日の・・・ 一緒のお風呂を体験した。お風呂では荷物がまだ届いてないからチノちゃんの部屋で一緒に寝ることになったり寝るときにいろいろおしやべりする約束をした。

「ふう・・・ 夜風が気持ちいい・・・」

こうして、夜風に当たっていると生前のことや家族のことを思い出

してしまう…。なら夜風に当たらなければ良いと思うのだが…。なぜか当たらなければならぬと自分自身が深く思ってしまったのである。

みんなは元気だろうか…。思っても仕方ないことだがやはり心配になってしまう。

「ココアさん…。(またあの顔をしている…)」

「あ、チノちゃん…。風が気持ちいいね。この町はとてもいいところだよ」

「…。そう…。ですか」

「うん、私ね…。この町に来てよかったと思ってるよ。チノちゃんやりゼさんに会えたり、それにこれからもっといろいろなことがありそうだね」

「そうですね…。ココアさん…。これからよろしくお願いします」

「うん、私こそよろしくねチノちゃん」

その後はおしゃべりタイムで夜遅くまでチノちゃんと楽しいお話をしていた。

3羽

ここは木組みの家と石畳みの町。私は春からこの町の高校に通うため引越してきた。下宿先のラビットハウスでバリバリ働いている。

「形だけけど家族もできました」

「そんな他人行事じゃなくても…」

いやいや、これは結構大事なこと。変に勘違いされてもチノちゃんが困っちゃうし。

「そういえば、この前お客さんに”ココアちゃんって妹ちゃん思いだね”って言われちゃってね。お姉ちゃんじゃないし、そんなことないですよって返したんだけど… あんまりわかってもらえなかったよ」

「そんなあからさまに否定しなくても…」

「しつかり言わないと変な誤解が起きて大変なことになっちゃうからね。ばしつと言わないと」

「でも… ココアさんは… その… 家族ですから… だから… ブツブツ…」

「チノちゃん？とにかく私もチノちゃんの家族として迷惑をかけないように頑張ってみるよ」

私はチノちゃんの頭を撫で、もう少し自分の行動を見直すことを考えた。

「んっ… う…」

「あ、リゼさん聞いてください。この間…」

「あっ…」

「次がある、頑張るのじゃ」

あれ？またダンディな声が… まあいいかな。

数日が過ぎてここの生活にもだいぶ慣れてきた。そして今日は高校の入学式。小学校や中学校の時にも思ったけどまたこの体験をするとは…

私は、ピンク色の制服に着替え鏡の前でどこか間違っていないか確認した。

よし、この制服けっこうかわいいかも。生前の時は黒くぱっとしないような制服だったからこういう制服は新鮮だった。

「ココアさんそろそろ行きますよ」

「あ、うんわかった… チノちゃんの中学校の制服可愛いね。青色… これはこれで…」

「何言っているんですか… もう…」

私は身だしなみを整え、チノちゃんの方に行き、いつもティツピーが乗っているチノちゃん頭を見た。そこには青色の帽子があり、さすがに学校にティツピーは無理だよねと心で思った。

「はやくしないと遅刻しますよ」

「あ、そうだね。それじゃあ行こっか」

「それでは、行つてきます」

「行つてきます」

「ああ行つてらっしゃい。気をつけて」

「はい」

タカヒロさんにあいさつをし、私たちは学校に向かった。

「あれ？チノちゃんもこっち方向なんだね」

「こつちの方向なんです」

いいことを知ったね。これなら登校の中の楽しさが増えたよ。

「それならこれからは途中まで一緒に」

「行けますね。嬉しいです」

チノちゃんも嬉しそう。こうやって誰かと一緒に登校も悪くないね。せっかくだしチノちゃんと話でも…

「では、私はこっちです」

「…… 別れるの早い、うん気をつけてねチノちゃん」

「はい、ココアさんも気をつけてください」

こうして、私とチノちゃんは別々になった。チノちゃん学校に友達いるのかな？あまりそういう話してないから少し心配になっちゃう。

「って…… 人の心配より自分だよ。一応地図で道は見たからわかってるんだけど……」

そう、私は自分が方向音痴なのを知っている。だからこそチノちゃんの心配より自分の心配をしなければならぬ。

「と、とにかく行くしかないよね…… っであれってリゼさん？」

「ん？ってココアじゃないか」

「おはようございますリゼさん。リゼさんも学校ですか？」

「ああ、ココアもか」

リゼさんの制服姿……ブレザーにネクタイ……似合っている。かわいというよりかっこいい。

「リゼさんの学校はブレザーなんですね、モノクロでいいですね」

「そ、そうか？ココアのほうがカラフルでかわいいと思うけど」

「わたし的にはシンプルのほうがしっくりしますね」

前の制服は白と黒だったからこういう明るい色の制服は慣れない。

それに、スカートが短すぎる。

「つとそろそろ学校に行かないとな。またラビットハウスでなココア」

「はいそうですね…… あ、リゼさん…… 待つてください」

リゼさんの髪に葉っぱが付いているのを見つけた私はリゼさんの近くに行き葉っぱを取った。

「葉っぱが付いていたので取っておきましたよりゼさん」

「な、なな……!?!」

「ふふ、ではこれで……」

そのままリゼさんとは反対方向の道に進んで歩き始めた。

さて、はやく学校に行かないと遅刻しちゃう……

それから数分歩いていると、路地裏で女の子の声が聞こえたような気がした。

「ちよつと、またあんた!?こつちこないで!!」

「ん?やつぱり聞き間違いなんかじゃ...」

とにかく行ってみよう。

私は、駆け足で路地裏の通路に向かったが、そこには金髪の女の子と灰色のうさぎがいた。

.....これはどうゆう状況なんだろう。

「ひい...!!」

「見てみぬ振りにはできないし...仕方ない」

女の子とうさぎの間に入った。

まあ、やることはうさぎを追い払うことなんだけどね...

「はいはい、この子が困ってるから他の所に行こうね」

「.....」

うさぎは無言で奥の方の路地へ歩いていった。

よし、これでもう大丈夫だよね。

「あ、ありがとうございます...ごぎいます...」

「いえいえ、つてはやくしないと入学式遅刻しちゃう...!」

「あつ」

「それじゃあ、気をつけてね」

私はそのまま、その場を走り去った。

「今の制服...でも入学式は明日つて...」

その後、何故かりゼさんに3回くらい会って、流石に迷子と自覚してりゼさんに学校の位置を聞いた。

りゼさんから学校の場所を聞き、なんとか学校に向かえそう。やつぱりこの方向音痴は何とかならないのかな...

「えっと… 確かこの公園を抜けて… ん？」

ふと周りを見渡すと、異様に野良うさぎがたくさんいた。少なくとも10匹は軽く超えている。

チノちゃんが見たら喜びそうだね。

「それにしても、なんでこんなに… ってあれ？」

「ほら… 栗羊かんよ」

うさぎが密集している中心に着物を着た女の子が栗羊かんをうさぎにあげようとしていた。

うさぎつて羊かん食べて大丈夫なのかな… ってこんなこと考えている場合じゃなかった。

私は、女の子の隣を歩いて…

「あら、その制服…」

行けなかった。

「ど、どうも…」

「その制服ってことは私の入る高校と同じ人ね」

「… 同じ制服ってことはあなたも新入生？」

「ええ、偶然ってあるのね、私驚いちゃったわ」

同じ高校の人か… ん？じゃあなんでこの子は制服じゃなくて和服なの？

え？入学式をサボるの？それとも忘れているの？

「えっと… なんで和服…？今日って入学式じゃ…」

「あら？入学式は明日よ？」

え？

私は急いで鞆に入っているプリントを取り出し内容を確認めた。

「あ、明日だ…。私ってば勘違いを…」

勘違いをした恥ずかしさがこみ上げてきて私はベンチにもたれかかった。

「ふふ、間違いは誰にでもあるわ、気にしちやだめよ」

「そ、そうだけど…」

「これでも食べて元気出して」

「うう…。それじゃあもう…」

「そうだ、ここであつたのも何かの縁…。少しお話ししましょ」

これが、千夜ちゃんとの出会いだった。

「私は保登 心愛。ココアで大丈夫だよ」

「ココアちゃんね。暖かそうな名前ね、私は宇治松 千夜。千夜って呼んで♪」

「わかったよ千夜ちゃん。それにしてもこの栗羊かん美味しいね」

「気に入ってくれた？それ私が作ったの」

「和菓子作れるんだそれはすごいね」

私はパンやある程度の料理しかつくれないうや…。和菓子…。昔よく食べてたな…

「それは私の自信作なの！…」

急に何かを考え出した千夜ちゃん。でも本当に美味しい。

「幾千の夜を行く月…。名付けて千夜月！栗を満月に見立てた栗羊かんよ！」

「…。そ、そうなんだ良い名前だね」

「ふふ、私たちが合いそうねココアちゃん♪」

「ソウダネ…。コホン…。同じ学校だしこれからよろしくね千夜ちゃん」

「ええ、よろしくねココアちゃん！」

こうして、友達が1人できた。やったよ姉さん、少し変わった子だけど仲良くなれそうです。

「ココアちゃんせつかくだから高校まで行ってみる？一目見ておいたほうが良いと思うのだけど」

「あ、そうだね。また迷子になったら嫌だし…お願いできるかな千夜ちゃん？」

「ええ、任せて！それにもしよかったら一緒に登校しましょ？その方が迷子にならないと思うの」

「それも…そうだね。ならそうしよっかな」

千夜ちゃんの言っていることには一理ある。道を知っている千夜ちゃんと一緒なら迷子にはならないよね。

一緒に登校する約束をして、私たちは高校に向かった。

「ここが私たちの通う高校よ」

「ここが…高校…楽しみだね。ここで3年間いろいろなことを…」

喋りながら千夜ちゃんの方を見ると、何かに気づいたような素振りを一瞬した。

「…千夜ちゃん？まさかここ中学校で最近まで通ってたから間違えたってことはないよね？」

「……………てへっ♪」

「千夜ちゃん…もうしようがない千夜ちゃんだね」

私は千夜ちゃんの方に手を向けて千夜ちゃんの手を握った。迷子になった私は何もいえないしこれはこれでかわいいと思った。

「…あ、あれ？怒ってないの？」

「こんなことで怒るわけないよ。それにここが千夜ちゃんの中学校って知れたし私的には嬉しいよ」

「ココアちゃん…」

「それじゃあ、高校に行こっか千夜ちゃん」

「うん♪」

手は握ったまま私たちは高校に向かい、無事辿り着けて明日の集合同場所を決め今日は解散した。

チノちゃんより早く帰ってきた私はお店の掃除をしていた。

「ただいま...」

あ、チノちゃんが帰ってきたみたい。さて、今日のことをなんて言うかな...

「あ、おかえりチノちゃん」

「あ、ココアさん。ただいまです高校の方はどうでしたか？」

「えっと...」

ここは素直に話したほうが良いよね。うう... けっこう恥ずかしい。

「それが入学式明日だったんだよね... あはは...」

「そうだったのですか。よくわかりましたね、高校で言われたのですか？」

「行っている途中でたまたま同じ新生の子と会って教えてもらったんだ。その子が面白い子でせっかくだから一緒に登校する約束もしたんだ」

「そうですか... (なんでしようなんかモヤモヤします)」

「あ、チノちゃんの方はどうだった？久しぶりに友達に会えた？」

「はい、メグさんマヤさんは変わらずお元気そうでした」

「そうか、メグちゃんとマヤちゃんって言うんだ。今度会ってみないな」

チノちゃんの友達どんな子なんだろう... 元気な子かな？落ち着いていた子かな？

「そうですね。私も制服に着替えてきます」

「うん、そろそろリゼさんも来るころかな」

こうして、今日も楽しく日々を暮らしていますよ姉さん。

4羽

今日は待ちに待った入学式。昨日は間違えちゃったけど千夜ちゃんと出会ったのを考えると良い間違いだっと思ったている。クラスは千夜ちゃんと一緒になって私も千夜ちゃんもとても嬉しかった。ちよつと学校の中で迷ってしまったけどなんとか1日乗り越えられた。

「ふう、いろいろ疲れたけど千夜ちゃんと一緒のクラスでよかったね」

「そうね、ココアちゃん学校でも迷子になってびっくりした」

「あはは・・・不思議と道に迷っちゃうんだよね。直したいんだけど中々直らなくて」

「でも大丈夫よ！私が付いているから安心してココアちゃん！」

「あ、ありがとう千夜ちゃん・・・ん？」

それだと常にずっとにいるんじゃないかと思っていたとき、どこから香ばしくそして実家でいつも嗅いでいた匂いが漂ってきた。

「この匂い・・・パンだね」

「え？パンダ？こんなところにいるのね」

「・・・」

これはツツコムべきなのかな？まあ、それは置いておいて・・・パンか、こつちに來てから作ってないな・・・久しぶりに作りたいけど・・・チノちゃんに相談してみようかな？

そのまま私たちはパン屋のパンを見ていた。

「いい匂い・・・やっぱりパンはいいね（米派だけど）」

「ココアちゃんはパン好きなのね♪私も好きよ！」

「実家がパン屋でね、近くですつと焼きたての匂いを嗅いでたら自然と好きになっちゃってね」

「パンを作れるなんてすごいわココアちゃん！」

「私的には和菓子を作れる千夜ちゃんのほうがずっとすごいと思うよ？久しぶりに作りたいな。こうパンを見てるとパンをこねる感覚

が蘇ってくるよ」

目をつぶると目の前にパン生地が浮かび上がってくる。ああ、あの柔らかい感触……ん？これは妙にリアルなさわり心地……

「んひゃーコ、ココアちゃん……？」

昔の感触を思い出していると、目の前の友達から妙な声が聞こえた。ふと目を開けて千夜ちゃんのほうを見ると私の手が千夜ちゃんの胸を鷲掴みしていた。

「……スーハー……一言……ごめん！昔のことを思い出していたら無意識に……」

「大丈夫よ！少しびびくりしたけどココアちゃんなら気にしないわ」
♪

満面の笑みの千夜ちゃんに感謝をしたけれど、揉んだ私だからわかる…… けっこう大きかった。ぐっ！まだ私にもチャンスは……

「でも気持ちはわかるわ！私も和菓子を見てるとアイディアが溢れてくるの。でもでも、なにより好きなのはできた和菓子に名前を付けることー！」

【煌めく三宝珠】【雪原の赤宝石】

「あはは……その才能にもある意味尊敬するよ……」

「大きいオープンならありますよ。おじいちゃんが調子乗って買ったやつが……」

『ポツ』

「本当に？これで久しぶりに作れるかな？あ、そうだせつかくだし今度の休みにみんなでこのお店の看板メニュー作ってみない？」

「カラー話ばっかしてないで仕事しろ……」

ぐうゝ

「リゼさんからはOKを貰いました。チノちゃんはどうかかな？」

「おい!?今のは違って…!」

ぐうゝ

「ッ!?ゝ!!」

そうゆうことで今度の休みにみんなでパンを作ることになった。せっかくだから千夜ちゃんも誘ってみようかな。

千夜ちゃんを誘っていいかとチノちゃんに聞いたら大丈夫と言ってくれた。ちよつといつもと雰囲気違ったような気もしたが、気のせいかな。

「この子が同じクラスの千夜ちゃんだよ」

「よろしくね」

「それでこの2人がチノちゃんとりぜちゃん」

「よろしくです」

「よろしく」

そして、数日後の休みの日が来た。まずは、2人に千夜ちゃんを紹介しないといけないからそこから始めていた。

「あら、そちらのワンちゃん…!」

「ワンちゃんじゃないです。ティツピーです」

「ティツピーはもふもふで最高だよ」

「あら本当ね、病み付きになるわ!」

何かと賑やかになり始めた。調理場に動物とはなんだ!と思うけどそこには触れないでおこう…

「（誰かアンゴラウサギって品種だつて説明してやれよ…）」
そこはあとでカクカクジカジカします。それではレッツクツキン
グ。

「それにしてもココアはパンも作れるんだな。なんだかんだでココアはすごいよ」

「そんなことありませんよ。やり方さえわかれば誰にでもできますからでも、気をつけることは少しありますからそれに注意すれば大丈夫です」

こねる作業が足りなかったり、十分に発酵させられなかったりと、いろいろ失敗してきた。それでも楽しいから何回も何回も作ったな。

「な、なんかココアからもすごいオーラが感じられる!?こ、これはまさしく…。」

リゼさんが何かブツブツ言っている。

「今日はお前に教官を任せました!」

「あ、そうゆうのは大丈夫です。それでは作っていきましょう」

「そんなあ!?!」

さて、まずは事前に伝えていたパンの中身を確認めようかな。

「それじゃあ、みんなパンの中に入れていたものを出してみよう」

「はい♪」

「断られた…。」

「私はこれです」

みんなが持ってきたものに私は驚いた。

千夜ちゃん

小豆

梅干し

海苔

チノちゃん

イクラ

鮭

納豆

胡麻昆布

リゼさん

イチゴジャム

ママレード

ああ、リゼさんは普通だった。いや普通がいいんだけどね。

「これってパン作りだよな...？」

リゼさん私も同意見です。ちなみに私はチョコやチーズと極一般的なものを持ってきている。

そこからは、パン生地を作る作業をした。チノちゃんがドライイーストを知っていて驚いた。頭を撫でたらどこからか2人分の視線を感じたような気がした。

だいたいパン生地が出来てきて次はパンの形を整える作業。これは、各自好きな形にということになった。

チノちゃんはおじいちゃんの顔らしく、オーブンでパンを焼く時は何故かティップピーが慌てていた。

「よし、だいたいこんな感じかな。あとは焼き終わるのを待って... あ、そうだ」

今のうちに、千夜ちゃんにラテアートのおもてなしをしてみよう。私は密かにお湯を沸かしてコーヒーにラテアートを書いた。

「千夜ちゃん今大丈夫？」

「ええ、一通り焼くところまで済ませたから大丈夫よ」

「ならよかった。千夜ちゃんにラテアートのおもてなしで書いてみたんだけどよかったら飲んでみて」

「わあ〜可愛い!」

私を書いたのはうさぎ。今日は綺麗に書いて過去最高かもしれない。

「ありがとう♪味わって頂くわね」

さて、あとは焼き終わるのを待つだけかな。少し不安もあるけどとりあえず焼き終わるのが楽しみかな。

時間は経ってパンは焼き終わった。パンの香ばしい焼きたての匂いが部屋一体を覆った。各自パンを手にとった。

「「いただきます」」

「美味しい！」

「ふかふかです！」

「さすが、焼き立てだな！」

「これなら、看板メニューにできそうなものがありますね」

「この梅干パン」

「この焦げたおじいちゃん」

「この焼きうどんパン」

「どれも食欲がそそらないぞ… ってココアなんだそれは!?!お前は普通のものを作ると信じていたけど…」

そう、私が手に持っているのは焼きうどんパン。なんとなく頭に浮かんできたからつい作ってしまった。

「まあ、せつかくですから楽しまないと… それとこうゆうのも作ってみました」

私は、かごをみんなの前に出した。かごの中にはティツピーをモチーフにしたパンが入っていた。

「名づけてティツピーパンってところかな」

「まんまだな… でも看板メニューは決まったな」

「リゼさんが持ってきたジャムを中に入れてみました。美味しくできているといいんだけど」

みんなティツピーパンを一口食べた。うん、これは美味しい。でも…

「美味しいです」

「ああ、たしかにジャムがいい感じだ！」

「でも、1つ問題が…」

このティツピーパンには問題がある。それは、ジャムを入れすぎたり食べているときなどにジャムが外に飛び出てしまう。

「こ、これは… なんか… エグイな」

「ですよね」

少し問題はあったがなんとかお店の看板メニューは完成した。

5羽

「このあたりだっけ？」

「聞いた限りではこのあたりのはずです。名前は何でしたっけ」

「確か・・・甘兔庵だったかな？」

『甘兔じゃと・・・？』

今私たちは千夜ちゃんのお家がやっているお店に行こうとしている。なんかパン作りのお礼にと千夜ちゃんから招待されたんだよね。

「あれ？チノちゃん知ってるの？」

「昔、おじいちゃんと張り合っていたと聞いています」

「ふうん、なんだかいろいろ偶然が重なってるね・・・ん？」

辺りを見ていると看板がやけに渋いお店を発見した。それにしても大きい看板だね。

「えくと・・・ああ・・・右から読むんだ。甘兔庵・・・うんここだね」

「すごい看板だな・・・この辺りでは目立ちそうだな」

「そのおかげで早く見つけられました。はやく入りましょう」

私たちは渋い看板のお店に入った。名前からして和風のお店となんとなく理解している。

その考えは当たっていた。中に入ると着物を着た千夜ちゃんが接客をしていた。お店も落ちついた感じでゆっくりするにはもってこの場所だ。

「あら、みんないらっしやい♪」

「「「こんにちは」」」

「あ、その和服やっぱりお店の制服だったんだ。あの時は違うことで頭がいっぱいであまり見れてなかったよ」

「あの時は仕事でお得意様に羊羹を届けていたの」

ふむ、やっぱり茶色の紙に着物はよく合うね。それにエプロンもまたアクセントになって良い。

「こ、ココアちゃん・・・？そんなにジロジロ見られると恥ずかしいのだけど・・・」

「あ、ごめんごめん！あまりにも似合ってたから。私も着物着てみ

そこには『ユコアちゃんどうして今日はおさげやきん？千夜』と書かれていた。

「ふ、風流だね」

「あ、これお品書きよ」

千夜ちゃんからメニューを貰い、私たちは頼むものを決めようと開いた。

「煌めく三宝珠… 雪原の赤宝石… 海に映る月と星々… なんだこの漫画みたいなメニューは…」

「流石にこれはわからな… あれ？」

私たちは理解不能な名前で何のデザートかわからなかったが、ふとメニューを見ていると何故かどの名前のデザートもどんなものか理解できた。

「これは… 抹茶パフエ… これがクリーム餡蜜で白玉がこれ…」

「わかるのか!？」

自分でも驚いた。さつきまでぜんぜん理解ができなかったのにいきなりわかったのだから。なんだこの感じ… なんなんだろう…

「と、取りあえず私はこの黄金の鯨スペシャルで…」

「よくわからないけど私は海に映る月と星々で」

「花の都三つ子の宝石…」

「はい♪ちよつと待っててね」

注文を取り終わると千夜ちゃんは奥へと歩いて行った。

「それにしてもさつきのメニューよくわかったな」

「いや、自分でも驚いていますよ。なんでわかったのか今でもわかりませんし」

「不思議なものですね」

本当にね… 世の中わからないものだね。

その後、出てきたデザートを食べながらゆっくり話した。途中、あんこに少し食べられたりラビットハウスと甘兎庵とのコラボをしようなどの話があった。

「「ちそうさまでした」」

時間は夕方。そろそろ帰ろうかな…。ん？チノちゃんがあんこのほうを見ている。

「チノちゃんあんこには触らないの？」

「チノは昔からティツピー以外の動物には懐かれたことがないんだ」

「それはまた…。でも一回触ってみたら？」

「は、はい…。！」

意を決したのかチノちゃんはあんこの方へと歩いていく。頑張れチノちゃん。

「…。！」

おそろおそろ指先であんこの耳を触ろうとしている…。超可愛い

「…。ッ！」

耳の次は抱っこのようだね。軽くなでた後ゆっくり胸へと持ち上げた。

「んう…。！」

…。可愛い動物に可愛い女の子。絵になるね…。うん。

抱っここに堪能したのか次は頭の上へにあんこを置いた。

やっぱりそこに置かないと落ち着かないのかな。

「頭に置かないと気がすまないのか!?!」

「まあ、ティツピーを乗せていますから」

こうして、わたしたちの心は癒されチノちゃんも満足そうにしていた。

「じゃあ、そろそろおいとまするか」

「みなさんまた来てくださいね」

「うん。そういえば私の下宿先が千夜ちゃんのところだったら着物を着てお店を手伝っていたのかもね」

そう話をした瞬間、千夜ちゃんの目が輝いたような気がした。

「ふふ、今からでも来てくれて良いのよ？いえ、来て♪」

「え？そ、それは…。！」

「従業員は常時募集中だもの！それにココアちゃんが来てくれたら

楽しくなるわ♪」

「え〜と…」

どうしよう… 困ったことになっちゃった。今のところチノちゃんの所から出る気はないし…

「だめだ（です）!!」

困っているとチノちゃんとりゼさんが話に入ってきた。

「ココアさんは家に来ています。ですから千夜ちゃんの所には行けません」

「同じ喫茶店でもそれだけは譲れないな」

「いいじゃない〜こっちは私一人なのよ? しくしく」

は、話がすごいことに… どうしよう。とにかく止めなきや。

「それとこれとは別です。それにココアさんは言ってくれました。私を家族として思ってくれろと…」

「なんて羨ま… こほん」

え? ちよつと待ってチノちゃん。それをここで言っちゃう? 私すごい恥ずかしいんだけど…

「ですからココアさんはラビットハウスで暮らすんです」

「くっ… まさかそんな良いことを言われているんなんて」

「まあまあ… それはともかく。ごめんね千夜ちゃん、今のところチノちゃんの所から出る気はないんだ」

「うう… わかったわ」

「その代わりお店の手伝いぐらいはしたいなと思っただけど…」

「もちろんだわ!!」

千夜ちゃんが勢いよく私の両手を握ってきた。正直ここまで喜んでくれるとは思っていなかった。最近の女子高生がわからない。もう歳かな…

「それじゃあ、また明日千夜ちゃん」

「ええ、また明日ココアちゃん♪」

甘兎俺を出た私たちはラビットハウスへと帰った。

途中、ティッピーとあんこが入れ替わっていることに気づきもう一

回甘兔庵に戻る羽目になった。

「それじゃあ、おやすみチノちゃん」

「はい、おやすみなさいココアさん… それとココアさん」

「うん？どうしたのチノちゃん？」

ドアを開けて部屋に入ろうとした時、チノちゃんに止められた。

「その… 甘兔庵での… ことで…」

「甘兔庵のこと… あ、下宿のことかな？」

「はい… 千夜さんの話を断って私の所に来てくれると言ってくれたことで… 本当によかったのですか？」

「よかったって？」

チノちゃんの声が少し震えていた。たぶん私が千夜ちゃんの所に行かなかったのは自分のせいと思っっているのかな。

「それは… 私のせいで… 「チノちゃん」… は、はい」

私はドアから手を離しチノちゃんの方へと歩き出した。まったくこの子つたら…

「あれは私がチノちゃんと一緒に居たから言ったのであつてチノちゃんのせいじゃないよ」

「でも… 同じ歳で同じ学校の…」

「歳も学校もそんなの関係ないよ。私はチノちゃんだからいいんだ。チノちゃんと一緒にお店を手伝ったりご飯を食べたりお風呂に入ったことが好きだからね」

「ココアさん…」

「恥ずかしいけどこれが私の気持ちだから」

頬を掻きながら言ってみたものすごく恥ずかしい。こんなこと今までに言ったことがないから… なれないことはするものじゃないね。

「ありがとうございます… それだけのことを聞ければうれしいで

す

「そ、そう?」

「はい、その… 寝る前に1つお願いしても良いですか…?」

「お願い? 私にできることなんなりと」

「お願いか… なんだろう… 少し顔が赤くなっているキノちゃんを見てそう考える。」

「その… 頭をなでてもらえませんか…?」

「頭を? それだけでいいの?」

「はい、昔よく母にしてもらっていたので…」

そうかずつとお父さんと暮らしていたからそういうことしてもらいたかったのか。もう可愛いところあるね。

「それなら喜んで」

私は優しくキノちゃんの頭をなでた。キノちゃんの顔は天使と思うほどの可愛い笑顔だった。

「これで大丈夫?」

「はい、ありがとうございます。これで気持ちよく寝れそうです」

「ならよかったよ。それじゃあおやすみキノちゃん」

「はいココアさんおやすみなさい」

こうして、私たちは部屋に入った。今日の疲れが出たのか目元が重くすぐに寝れそうだった。

それから時間がたったのかわからないがふと目を開けると私は真っ黒い明らかに自分の部屋ではないところに立っていた。

「ここは… あの時に似ている… でも体はちゃんとある… 夢か

な？」

そうか、夢を見るくらい疲れていたのか… 納得していると

「ん〜夢だけど夢じゃないんだよ？」

「ん…?」

後ろのほうから声がした。こんなところに人がいるなんて… 私
は恐る恐る後ろを振り返った。いや振り返ってしまった。

「えへへ、なんて説明したら良いのかな？私にもわからないよ
〜…」

「え… そんな… あなたは… わた… し!？」

私の目の前には私と同じ姿の人物がいた。いや、私はすぐにわかっ
たわかってしまった… この子は”ココア”だ。私が死ななければ
保登心愛として暮らすはずだった子だ。

私は口を開いて今までのことやこうなってしまった謝罪、今の感情
を話そうと話さなければならぬと思った。

しかし、急に頭が重くぐらつきはじめた。

やばい… 意識が薄く…

体に力が入らなくなり”ココア”に体を支えてもらった。

「私はいつもここから見てるよ。私の気にしないで、あなたのこと
は私がよく知っているから」

そしてそこから私の意識がなくなった。

6羽1part

「美味しい…」

「そうだね、コーヒーは前から飲むほうだったけどここに来てから…特にチノちゃんが入れてくれたコーヒーを飲んでからさらに好きになったよ」

「そ、そうですか…好きになってくれているのでしたら私としては嬉しいです…」

そうやってチノちゃんはコーヒーカップに顔を隠した。褒められ慣れてないのかその仕草はとても可愛かった。

「おーい、そろそろ開店だぞ2人共」

「あ、はいわかりました。カップ片付けるねチノちゃん」

カップを持ち洗い場まで持って行く途中で私はあることに気が付いた。

「そういえばチノちゃん、ラビットハウスのカップってシンプルなのが多いよね」

「シンプルイズベストです、それに落ち着いて飲むことができます」

確かにそれなら一理あるんだけど、女性のお客さんもけっこう来るしもう少し華やかでもいい気がする。

「そうなんだけど、なにかこう…もう少しカップも色々あれば楽しいし華やかでお店も良い雰囲気になると思うんだけど」

「それでしょうか?」

「女性のお客さんもいるし華やかなら学生さんとか入りやすいと私は思うかな」

「うーん、確かにココアの言うとおりがちな。私も学校でそんな話

聞いたことがあるぞ」

「あ、でもお店の方針とかあるし無理に考えなくてもいいよ…！祖父さんから代々やっているお店だしね」

そう伝えるとチノちゃんはティツピーを顔の前に持って何かを話し始めた。

そういえばティツピーも祖父さんが生きていた時にはいたんだよね。

チノちゃんは話し終わるとティツピーを頭に戻した。

「いえ、大丈夫ですよ。それにカップのほうも新しいのが欲しかったみたいですから」

「みたい？」

「あ…！いえ、欲しいと思っていたので…」

「そうか、なら今度みんなで買いに行ってみるか？」

「それはいいですね、私まだここらへんのことあまり知らないのだからこれを気に色々見て回ってみたいです」

「決まりみたいです」

こうして私達は新しいカップを求めに休みの日に出掛けることになった。

「ここですか？」

「そうみたいだな、取り合えず入ってみるか」

そのまま私達はお店の中に入った。

中に入ってみるとお店のあっちこっちに色んなカップが置いて

あった。かわいいものから変わった形のものまでバリエーションは豊富で少しわくわくしてきた。

「うわく色々なカップがありますね。探すのに時間かかりそう」

「時間はあるんだしゆっくり探せばいいさ。お、これなんてどうだ？」

リゼさんもけっこう楽しそうに探している、チノちゃんも目を輝かせて辺りを見ていて可愛い。

私も何かいいの探そうかな。

「あつ！あのカップかわいいですね」

「あ、おい走ってら危な…」

「…っあ」

棚においてあったかわいいカップを見に近づいた時足を躓かせそのまま棚に頭から当たった。

「…!!」

「うゝあいたた…すみません…」

当たったときに落っこちた写真立てをチノちゃんがそして私をリゼさんがキヤツチした。

「まったく、気をつけろ（てください）」

「あはは…ごめんなさい」

「(予想を裏切らない…)」

「じゃあ、気を取り直して探しましょう…ってその写真立てに写っているの…」

写真立てにはうさぎがカップに入っている写真がありとても

キュートだった。

2人もその写真を見てほっこりしていた。

「あれですね、ティツピーもこんな風に入ってみたら注目度今より上がりそうですね」

「いや、そもそもティツピーが入る大きさのカップが無いだろ」

「それもそうですね、ティツピー意外と大きいですからね」

「いえ、ありました」

「え？」

チノちゃんの声が出た方向を向くとそこには顔がすっぽり入りそうなほどの大きなカップを持ったチノちゃんがいた。

「あるのかよ!？」

「では入れてみましょう」

チノちゃんが頭に乗せていたティツピーをカップの中に移した。

ティツピーがこつちを向いてどうじゃっていつているみたいな顔をしてきたけど私は少し疑問を持った。

「……………」

「何か違うような…」

「ご飯に見えます」

「ティツピーは丸いからな」

『なに!？』

そんなこんなでまたラビットハウス用のカップを探し始めた。

さすがにこんだけあると一個一個を見ていると疲れ…ん？

私は窓の近くの棚に飾ってあった一個のカップを見つけた。うさぎの柄が入っていてラビットハウスにぴったり。

「これなんてどうで…あつ」

カップに手を伸ばしたら前の方からも誰かの手が伸びてきていて私の手とぶつかった。

「あ、すみません！」

「あ…え……」

私は急いで謝り手を当ててしまった人の方向を向いた。

そこには金髪のいかにもお嬢様という風格の女の子が申し訳なさそうな顔で少し戸惑っていた。

あれ？この服どこかで見たような。

「こんなシチュエーション漫画で見たことがあります」

「よく恋愛に発展するよな」

チノちゃんとりゼさんが何か言ってるけど気にしないで置こう。
とりあえず何か話しかけたほうが良いのかな。

「すみません、このカップ可愛いですよね。あ！よかったらお先に
見てください」

「い、いいんですか…？」

「他にもまだ見えていないカップがあるので私は一通り見た後で大丈夫
ですから」

「そ、そんな申し訳ないです！私はここに何回か来ているのでお先
に見てください」

私が他のカップを見に行こうとしたのを悪いと思ったのかその子は私に先を譲ろうとしていた。

なんて優しい子なんだろう。お姉さん泣いてきちゃう…

「何をやってるんだココ…ってシヤロじゃないか」

「え？リ、リゼ先輩!?!どうしてここに？」

目の前にいる女の子はリゼさんを知っている見たいだった。それならここからはリゼさんに任せることにしよう。

「ああ、学校の後輩だよ。ココア達と同じ年だ」

「私と同じ年ですか、学校が違うところまで見た目が変わるんですね」

「せ、先輩はどうしてここに？」

「バイト先で使うカップを買いに来たんだよ。まさかシヤロがいるなんて思わなかったよ」

シヤロさんもだいぶ落ち着いてきたのか表情は柔らかくなり楽しく話し始めている。

「それでシヤロは何か買ったのか？」

「いえ、私は見るだけで十分なので…」

「見るだけ？」

「ええ」

そう答えるシヤロさんは白いカップを手に取り癒されている時になる表情をし始めた。

「この白くすべらかなホルムウ…フオハハ…」

「人には色々な趣味がありますからね。私は良いと思いますよ。ね、ココアさん…」

「…そだね」

「(えい!なぜそこでフオローを入れたんだ!)」

「そういえばお二人は学年が違うのに知り合ったんです?」

「それは私が暴漢に会いそうなところを助けてくれたの…」

リゼさんやりますね、さすがに私は怖くて行けなさそう…でもチノちゃんとかが会ってたらいくのは間違いない。

「かつこいいところあるんですねリゼさん」

「ん…?待てそんな事言つてない!本当は…」

「ああ!言つちやダメです!!」

「シヤロがうさぎが怖くて道を通れなかったのを助けただけってわけだよ」

「……………」

私とチノちゃんは視線をリゼさんからシヤロさんに移した。

「うさぎが怖くて…わ、悪い!?!」

「いや、そんなことは…あれ?私もそんな状況を見たことあるような」

あの時の子もうさぎが怖くて道進めなかったっけ…?

「気づいてなかったの…?」

「あ、やっぱりあの時の子だったんだ!いや〜こんな再開ってあるんだね。あ、私ココアっていいいますシヤロさん」

「そうねって、同い年なんだし敬語もさん付けもいらないわよ…その方が私もあなたも疲れないでしょ」

おお、なんとという大人な対応。確かに同い年から敬語を言われると距離を感じるし気も使わなきゃいけないよね。

「了解シャロちゃん！つでこの子がチノちゃんしつかり者の頼れる子だよ」

「よ、よろしくお願いしますシャロさん」

「ええ、よろしくねチノちゃん」

なんかこの2人落ち着いているあたりが似ているね。

「そういえばリゼ先輩達はカップを探しに来たんですよね？これなんてどうですか」

ここからシャロちゃんのカップ紹介が始まった。香りを引き立たせるカップだったり持ち手が工夫されているカップだったりとどれも面白いものばかりだった。

コップの形にも色々な意味があったことに驚きつつ、お店用のコップを探し始めた。

6羽2 part

シャロちゃんのカップ紹介が終わりに近づいたころ、リゼさんがあ
ることに気づいた顔をした。

「うーん、シャロが紹介してくれているカップはどれも紅茶用が多
いな。うちはコーヒーのお店だからカップもコーヒー用じゃないと
だめじゃないか？」

「あ、確かに…これらって紅茶用ですもんね」

紅茶用のカップにコーヒーを入れたらどうなるんだろう…ちよつ
と気になる。

そんなことを考えているとシャロちゃんが反応した。

「え…そうなんですか？リゼ先輩のバイト先行って見たかったの
に…」

「あれ？シャロちゃんってもしかしてコーヒー苦手だったり？」

「くにゅ…」

私の質問にシャロちゃんはコクリと首を縦に振った。

紅茶が飲めるならコーヒーも飲めるとは限らないよね。

「苦いのが苦手なら甘くしてみたら？私は甘さ控えめなものも好きだ
けど、M O X coffeeも好きだし？てかあれぐらいがちょうど
いいし」

「M O X coffee？なによそれ…って苦いのが苦手ってわけ
じゃないのよ」

「では、何が原因なのでしょう？」

くっやっぱり通じないか…

あの甘さが癖になるのに勿体ない、今度作ってみようかな…

「え…く…そのカフェインを取り過ぎると異常なテンションになる
みたいなの」

「あ、コーヒー酔い…それは珍しい」

「自分じゃわからないんだけどね」

「コーヒーが飲めなくてもいいからさ、遊びきなよ」

「あ、はい！」

リゼさんの前だからかシャロちゃんが緊張している。

でも確かに、喫茶店って言ってもコーヒーしかないってわけじゃないし、シャロちゃん用に紅茶でも用意してみようかな。

後で紅茶について聞こうと考えながら周りのカップに目を向ける。

「それにしても色々なカップが置いてあるだけあって値段がすごいのもあるね…」

「アンティーク物はそのくらいするわよ」

「シャロちゃんもこういうの持ってるの?」

「さすがに持ってないわよ、欲しいとは思ってるけど…」

学生にはやっぱりきついよね、どんなものも値段はかかるものだし

…

そういえばこつちに来てから趣味的なものを見つけてなかった気がする。今度そういう時間もとってみようかな。

「ってそろそろお店で使うカップを探しましょう」

「いろいろあり過ぎて脱線しちゃったね。お店のはシンプルのが多かったから模様が映ってるのとかどうかな?」

「いいかもしれないな、花の模様とか動物の模様とかどうだ?」

「い、いいかもです!主張しすぎなくて見栄えもいいです!!」

脱線したカップ選びもちゃんと戻ってどんなものかいいのか話し合った。

選んだカップは花柄、動物、波上の線、果物を各種何個か購入した。

「ふう…なんとか決まったね。いろいろあり過ぎて思いのほか時間がかかったね」

「でもこれでお店の雰囲気も良くなるんじゃないか」

「ですね!時間ができたら、その時は顔を出させていただきます!」

「待ってるねシャロちゃん!」

「…」

「チノちゃん?」

じっと固まってるチノちゃんの方を見るとチノちゃんが見てる先には2つのカップに同じ柄が掛かっている、いわゆるペアマグカップというものかな。

「お揃いの柄だね、気に入ったの？」

「あ、いえ…その…ココアさんも家に来て自分用というか、そういうのもあつていいと思ひまして…」

「私を選んでくれてたの？」

「ご、ご迷惑でしたか？」

「ううん、迷惑じゃないし嬉しいよ！」

チノちゃんはなんて優しい子なんだろう。どこぞの姉と違ってしつかりしてていい子だ。

「じゃあ、せっかくだしこのお揃いのカップ買おうよ」

「い、いいんですか？」

「記念にね、買うなら何か特別なものをつてね」

「ココアさんがそういうなら…」

「シャロく空気が甘くておいしいなあ」

「そうですね、先輩このお揃いのやつよくないですか」

「じゃあ、私たちも買うか」

「はいい」

そして私とチノちゃんほうきぎ柄のお揃いのカップを買った。

リゼさんたちもお揃いのカップを買ったとのこと仲がいいね。

「カップも無事買ったことだし、そろそろラビットハウスに帰る？」

「そうですね、買ったカップをお店に置かなければなりませんし」

「そうだな、私も雰囲気が必要なふうになるか見てみたいし行こうかな、シャロはどうする？」

「私はここまでで大丈夫です、今度行ってみたときの楽しみにしておきます」

そういつてシャロちゃんとはそこで挨拶をして別れた。

お店に戻ってからはカップをお互いに持って誰が似合っているかの勝負が行われたりした。

その日の夜はチノちゃんと一緒に買ったカップでホットミルクを飲んでお喋りをした。